

2022年10月16日(日)

老球の細道695号

名コーチとの出会い「世界のコーチ、トスティン・ロイブル」⑦

会津バスケットボール協会 室井 富仁

昨日突然、元長崎鶴鳴女子高校監督の山崎先生から電話が来た。BSNHKで放映していた「新日本風土記」で見聞録を扱った番組を観ていたら、大雪下の会津で行ったクリニックを思い出したらしい。早速私のところへ電話をよこし当時の思い出を語り合った。ちょうど「名コーチとの出会い」シリーズで山崎先生を書いた後だったので、バスケットボールの神様が呼びよせてくれたのだろうか。先生は80歳を過ぎ、大病を患ったとのことであったが、電話から伝わる声は全盛時代と全く変わりなく、私に大きな感激を与えてくれた。

話の中で、今でもバスケットに関わり続けていて、コーチと審判もやっているとのことであった。自賛していたが「私は日本最高齢の審判員ではないだろうか!」。何事も日本一が似合う山崎先生であった。

トスティンシリーズを書いているが、彼は以前長崎でクリニックをしている。そしてそのクリニックでトスティンと山崎先生は出会っている。お互いに毒舌で、ユーモア満点。二人がどのような会話をしたのか想像するだけで頭からよだれが出て来そうである。ちなみにトスティンとの出会いを作ってくれた佐藤光彦先生も会津で山崎先生と出会っている。

前置きが長くなってしまったが、もう少しアメリカの話に付き合ってもらいたい。

【カリフォルニア大学ドミンゲスヒルズ校練習見学】

この大学を指導しているのは「ディーブ・ヤナイ」という日系二世のコーチであった。この大学はアメリカではさほど強豪チームではないのだが、普通の能力の選手をハイレベルに育て上げることで定評のあるチームだった。

体育館は乱雑で、日本ではあまり好ましくない環境であったが、コーチ・ヤナイはがっしりした体格でスキンヘッド、眼光鋭く、とても誠実で情熱溢れるコーチであった。また、頑固なまでのコーチ哲学を持ち、自分の信じることを貫き通すコーチであった。

アメリカの大学コーチに共通することは、ほとんどがプロコーチであるということである。バスケットの指導だけで生計を立てており、コーチKのように超一流になると年俸数億円になるという。これだけの報酬を得てやっているのに、日本の片手間ボランティア、「昔の名前で出ています」コーチとはわけが違う。必死に勉強し、必死に指導する。負ければ首を切られて路頭に迷う生活を強いられる。

練習を見ていたら日本の実業団チームがやっているドリルと同じことをやっていた。後で質問したら、日本のトップレベルのコーチがこの大学へ練習を見学に来て、ディーブさんに教えを受けていくということであった。かつては全日本男子チームもよく遠征に来ていたらしい。日系二世コーチということと普通の能力をハイレベルに育てるということで、日本代表の指導者たちにも共通するところがあり、教えを受けやすかったのだろう。

日本のあちこちの色々なコーチ達がここまで来て勉強していることに驚かされた。〈続〉